

**[A年] 聖霊降臨節第14主日(2021年8月22日)****【旧約聖書日課】ハバクク書3章17～19節**

- 17 いちじくの木に花は咲かず  
ぶどうの枝は実をつけず  
オリーブは収穫の期待を裏切り  
田畑は食物を生ぜず  
羊はおりから断たれ  
牛舎には牛がいなくなる。
- 18 しかし、わたしは主によって喜び  
わが救いの神のゆえに踊る。
- 19 わたしの主なる神は、わが力。  
わたしの足を雌鹿のようにし  
聖なる高台を歩ませられる。  
指揮者によって、伴奏付き。

**【使徒書日課】ローマの信徒への手紙8章18～25節**

18現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないと思われたいです。19被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。20被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。21つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。22被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。23被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。24わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。25わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

**【福音書日課】マタイによる福音書13章24～43節**

24イエスは、別のたとえを持ち出して言われた。「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。25人々が眠っている間に、敵が

来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。26芽が出て、寒してみると、毒麦も現れた。27僕たちが主人のところに来て言った。『だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。』28主人は、『敵の仕業だ』と言った。そこで、僕たちが、『では、行って抜き集めておきましょうか』と言うと、29主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。30刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」と、刈り取る者に言いつけよう。』

31イエスは、別のたとえを持ち出して、彼らに言われた。「天の国はからし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔けば、32どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。」33また、別のたとえをお話しになった。「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」

34イエスはこれらのことをみな、たとえを用いて群衆に語られ、たとえを用いないでは何も語られなかった。35それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「わたしは口を開いてたとえを用い、天地創造の時から隠されていたことを告げる。」

36それから、イエスは群衆を後に残して家にお入りになった。すると、弟子たちがそばに寄って来て、「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。37イエスはお答えになった。「良い種を蒔く者は人の子、38畑は世界、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らである。39毒麦を蒔いた敵は悪魔、刈り入れは世の終わりのことで、刈り入れる者は天使たちである。40だから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそうなるのだ。41人の子は天使たちを遣わし、つまずきとなるものすべてと不法を行う者どもを自分の国から集めさせ、42燃え盛る炉の中に投げ込ませるのである。彼らは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。43そのとき、正しい人々はその父の国で太陽のように輝く。耳のある者は聞きなさい。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## ハバクク書3章17～19節

17 いちじくの木に花は咲かず

ぶどうの木は実をつけず

オリーブも不作に終わり

畑は実りをもたらさない。

羊はすべて囲いから絶え

牛舎には牛がいなくなる。

18 それでも、私は主において喜び

わが救いの神に喜び踊る。

19 神である主はわが力

私の足を雌鹿のようにし

高き所〔直訳→私の高い所〕を歩ませてくださる。

指揮者によって、弦楽器で。

## ローマの信徒への手紙8章18～25節

18思うに、今この時の苦しみは、将来私たちに現されるはずの栄光と比べれば、取るに足りません。

19被造物は、神の子たちが現れるのを切に待ち望んでいます。20被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、服従させた方によるのであり、そこには希望があります。21それは、被造物自身も滅びへの隷属から解放されて、神の子どもの栄光の自由に入るという希望です。22実に、被造物全体が今に至るまで、共に呻き、共に産みの苦しみを味わっていることを、私たちは知っています。23被造物だけでなく、霊の初穂を持っている私たちも、子にさせていただくこと、つまり、体の贖われることを、心の中で呻きながら待ち望んでいます。24私たちは、この希望のうちに救われているのです。現に見ている希望は希望ではありません。現に見ているものを、誰がなお望むでしょうか。25まだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは忍耐して待ち望むのです。

## マタイによる福音書13章24～43節

24イエスは、別のたとえを彼らに示して言われた。

「天の国は、良い種を畑に蒔いた人に似ている。

25人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。26芽が出て、実を結ぶと、毒麦も現れた。27僕たちが主人のところに来て言った。

『ご主人様、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どうして毒麦が生えたのでしょうか。』

28主人は、『敵の仕業だ』と言った。そこで、僕たちが、『では、行って抜き集めておきましょうか。』

と言うと、29主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。30刈り入れ

まで両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、

麦の方は集めて倉に入れなさい」と刈り取る者に言いつけよう。』

31また、別のたとえを彼らに示して言われた。

「天の国は、からし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔くと、32どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て

枝に巣を作るほどの木になる。」

33また、別のたとえをお話しになった。「天の国は、パン種に似ている。女がこれを取って三サトンの小麦粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」

34イエスはこれらのことをみな、たとえを用いて群衆に語られ、たとえを用いずには何も語られ

なかった。35それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「私は口を開いてたとえを用い、

天地創造の時から隠されていたことを告げよう。」

36それから、イエスは群衆を後に残して家にお入りになった。すると、弟子たちが御もとに来て、

「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。37イエスはお答えになった。「良い種を蒔く者は人の子、38畑は世界、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らである。39毒麦を蒔いた敵は悪魔、

刈り入れは世の終わりのことで、刈り入れる者は天使たちである。40毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそうなるのだ。41人の子は天使たちを遣わし、つまずきとなるものすべて

と不法を行う者たちとを御国から集めて、42燃え盛る炉に投げ入れる。彼らは、そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう。43その時、正しい人々はその父の国で太陽のように輝く。耳のある者は聞きなさい。」

**黙想のためのノート****次主日教会暦と聖書日課について**

・8月22日「聖霊降臨節第14主日」の日課主題は「忍耐」。福音書日課は、「マタイ福音書」から、主イエスが「たとえ」で教えられたことを伝える場面で、「毒麦のたとえとその説明」の箇所。旧約日課は、「ハバクク書」から、預言書末尾の終末的預言を告げる箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、

**旧約日課(ハバクク3章より)**

・「ハバクク書」は、正典「十二小預言者」の8番目に置かれた預言書で、「預言者ハバクク」の標題が付られているが、預言者の時代や出自は不詳。紀元前のユダヤ伝承を反映する「旧約聖書続編(第二正典/アポクリファ)」に含まれる「ダニエル書補遺〜ベルと竜」には、ペルシア王キュロスに仕えたとされる伝説上の人物ダニエルと同時代の預言者として「ハバクク」が登場するが、旧約学者の間では「預言者エレミヤ」と同時代の預言者と考えられている。本預言書は、ラビ・ユダヤ教の伝統の中で重んじられ、パウロが「ローマの信徒への手紙」1:17で引用している2:4「神に従う人は信仰によって生きる」は、ラビ文書でもしばしば引用されているという。

・日課箇所を含む3章は、1~2章とは区別された標題「預言者ハバククの祈り。シグヨトの調べに合わせて」(3:1)から始まり、奏法の指示「指揮者によって、伴奏付き」で終わる、一編の讃歌(詩編)である。「預言者ハバクク」が、神殿祭儀で用いられた典礼讃歌(詩編)伝承の担い手と考えられる神殿祭司の系譜の中でも重要な地位にある人物であったことを推認させる。

・19節「聖なる高台(バーマー)」は、正典「律法と預言者」ではもっぱら排除すべき否定的存在として語られる地方聖所を指して用いられる用語であるが、同列に「エルサレム(神殿)」を指して用いられる例もある(ミカ1:3~5)。しかし、「詩編」18:34には、本節と類似の表現で肯定的な意味に用いられている例もあることから、本章参加は神殿祭儀の典礼文化の中で完成された讃歌(詩編)をほぼ修正することなく保存しているのだろう。正典における「預言者」は、「祭司的伝統」を継承する系譜に位置する存在だからこそ、正典を編纂した共同体において信頼されたのである。

**使徒書日課(ローマ8章より)**

・「ローマの信徒への手紙」は、使徒パウロが未訪のローマ教会に宛てて、自らの訪問計画とその後のエスパニア伝道計画への協力を求めて記した書簡。新しい伝道計画への協力を求めるために、異邦人伝道に対する明確な神学的動機付けを提示しようとしている。日課箇所は、1章から展開してきた異邦人の救いに関する原則論を結論付ける中に位置づけられる。パウロは、ユダヤ人と異邦人という二項対立的な神学観の根底にある、「律法」(と「預言者」という正典全体)の

授与者としての歴史的存在であるユダヤ人の優位性を、「律法」(に含まれる「法」「掟」「定め」など)に内在する問題を提示することで否定して見せることで超克し、ユダヤ人・異邦人という二元論的思考に陥らない一元論的救済観を提示しようとしている。その根拠とされているのが、イエス・キリストによってユダヤ人も異邦人も等しく唯一の神を「父」と呼びうる関係にすでに入っているという聖霊論的な事実である(8章前半)。この一元論的救済観を徹底するパウロは、日課箇所でも、ユダヤ人・異邦人という二元論を超克するのにとどまらず、人間と他の被造物という二元論をも超克する救済観を提示しようとしている。

・旧約的伝統の中で、人間以外の被造物の救済という問題は、ほとんど関心を持たれていないように見える。しかし、それは、被造世界が救済を必要としない存在であるとか、あるいは被造世界が救済に値しない(救済され得ない)存在であると前提しているからではない。実際、「創世記」9章では「ノア」に対する救済の約束の中に「すべての生き物、すべて肉なるもの」が含まれており、旧約各書の中にも、神には被造物の救済計画があることを示唆する句がある。そこで、旧約各書に依拠して自身の救済神学を提示してきたパウロは、日課箇所においても、「ノア物語」を含めた旧約中に見られる被造物の救済に関する記述を踏まえて、論を示していると考えられる。

**福音書日課(マタイ13章より)**

・日課箇所は、共観福音書伝承の中で重要な中心伝承と考えられる「種を蒔く人のたとえを語られた主イエスについて」の逸話に、「マタイ」が独自に追加した「毒麦のたとえ」が挿入されている箇所である。「福音書」中で伝えられる主イエスの「たとえ」は、ほぼすべて主イエスご自身の説明や解説を伴わない形式で閉じており、聞き手(読者)自身に解釈を要求する「開かれた教え」として扱われているが、その中で例外となっているのが「種を蒔く人のたとえ」と「毒麦のたとえ」である。「種を蒔く人のたとえ」では、「たとえ」と「解説」が共観福音書中で良く保存されており、初代教会の早い段階で重要な教えの伝承として完成・確立していたものと考えられる。一方、「毒麦のたとえ」は、他の福音書では示唆する教えも含めてまったく伝えられておらず、「マタイ」が独自の伝承資料に基づいて付加したのと考えられる。その際に、「種を蒔く人のたとえ」に並置させる意図で、「たとえ」に加えて「解説」を置いたものと推定される。この「解説」が、元来主イエスがお語りになられたものとして伝承されていたのか、弟子たちが共通理解した「解釈」として伝承されたものかは、判断できないが、どちらのたとえの「解説」も教会的文脈を前提としたときによく理解できるという点は同じである。「種を蒔く人のたとえ」からの一連のたとえは、「天の国／神の国」について教えるためのものとして、ここにまとめられている。

・「毒麦(ツィーツァニア)」は、厳密に植物種を同定できないが、栽培ムギ類に生活史が同調・擬態していることで知られるイネ科ドクムギ属の雑草・牧草を指していると考えられている。ドクムギ類のうち「ライグラス」と呼ばれるネズミムギやホソムギでは、内生菌(バクカクキン)の産生する神経毒アルカロイドによって、飼料として摂取した家畜が歩行異常などの神経障害を起こす場合があることが知られている。日課箇所では、おそらく毒性のあるものではなく、ムギに擬態して繁茂する雑草という程度のものを想定しているのであろう。

・「種を蒔く人のたとえ」は「御言葉を聞くこと」に主眼があり、「御言葉を蒔く人のたとえの解説」は、「御言葉を聞いて行うこと」に主眼がある。これに対して、「毒麦のたとえ」は「御言葉を聞いて行うことに対する評価の可否」に主眼が置かれ、「毒麦のたとえの解説」は「御言葉を聞いて行うことに対する最終的な神の評価と報い」に主眼が置かれている。これら一連のたとえによって、マタイは現実の教会共同体における相互に対する信仰評価の問題を神の終末審判に託し、現時点での一致を優先すべきことを教えているのだろう。ドナティスト論争におけるアウグスティヌスの論拠、また宗教改革者 M.ルターや J.カルヴァンの教会観の論拠になっている。

#### 来週の誕生日 (8月22日～28日)

#### 主日礼拝の讚美歌から

- ・21-13 番「みつかいとともに」(= I 162 番「あまつみつかいよ」)は、18 世紀英国の独立教会牧師ペロネーの作詞。彼の父は国教会司祭でウェスレー兄弟のメソジスト運動の賛同者だったが、彼自身は、ウェスレー兄弟らとは袂を分かって独立教会に属した。曲は、18-19 世紀米国で不動産業を営みながらピューリタン教会の牧師も務め、音楽活動もしたホールデンが、この詞のために作曲。
- ・21-471 番「勝利をのぞみ」(= □134 番、▣164 番)は、18 世紀ごろから歌われていた黒人霊歌(もとは労働歌?)が原型となって 1940 年代から広く歌われるようになったと考えられている讚美歌。1960 年代のアメリカ公民権運動の中で盛んに歌われるようになり、教会の讚美歌集にも取り入れられてきたが、近年の讚美歌集では採用されなくなっている。ワシントン大行進(1963年8月28日)でこの歌を歌いながら行進する人々の姿が映像で記録されている。
- ・21-473 番「世界の望みなる主よ」は、1926 年に米国メソジスト教会で任職され、神学校教授も歴任した女性牧師ジョージア・ハークネスが、1954 年開催の世界教会協議会の主題「イエス・キリスト、世界の希望」に基づいた讚美歌公募に応じて採用された歌詞で、いくつかの異なる曲が付されて歌われてきた。『讚美歌 21』で付された曲は、この歌詞のための曲公募に応募した広島流川教会信徒・伊藤陽子の作。

#### 21-13「みつかいとともに」

### All hail the power of Jesus name!

1. All hail the power of Jesus' name! / Let angels prostrate fall; / bring forth the royal diadem, / and crown him Lord of all. / Bring forth the royal diadem, / and crown him Lord of all.
2. Ye chosen seed of Israel's race, / ye ransomed from the fall, / hail him who saves you by his grace, / and crown him Lord of all. / Hail him who saves you by his grace, / and crown him Lord of all.
3. Sinners, whose love can ne'er forget / the wormwood and the gall, / go spread your trophies at his feet, / and crown him Lord of all. / Go spread your trophies at his feet, / and crown him Lord of all.
4. Let every kindred, every tribe / on this terrestrial ball, / to him all majesty ascribe, / and crown him Lord of all. / To him all majesty ascribe, / and crown him Lord of all.
5. Crown him, ye martyrs of your God, / who from his altar call; / extol the Stem of Jesse's Rod, / and crown him Lord of all. / Extol the Stem of Jesse's Rod, / and crown him Lord of all.
6. O that with yonder sacred throng / we at his feet may fall! / We'll join the everlasting song, / and crown him Lord of all. / We'll join the everlasting song, / and crown him Lord of all.

#### 21-471「勝利をのぞみ」

### We shall overcome

1. We shall overcome, we shall overcome, we shall overcome someday! Oh, deep in my heart I do believe we shall overcome someday!
2. We'll walk hand in hand.
3. We shall all be free.
4. We shall live in peace.
5. The Lord will see us through.

#### 21-473「世界の望みなる主よ」

### Hope of the World

1. Hope of the world, thou Christ of great compassion, / speak to our fearful hearts by conflict rent. / Save us, thy people, from consuming passion, / who by our own false hopes and aims are spent.
2. Hope of the world, God's gift from highest heaven, / bringing to hungry souls the bread of life, / still let thy Spirit unto us be given / to heal earth's wounds and end her bitter strife.
3. Hope of the world, afoot on dusty highways, / showing to wand'ring souls the path of light; / walk thou beside us, lest the tempting byways / lure us away from thee to endless night.
4. Hope of the world, who by thy cross didst save us / from death and dark despair, from sin and guilt; / we render back the love thy mercy gave us; / take thou our lives, and use them as thou wilt.
5. Hope of the world, O Christ o'er death victorious, / who by this sign didst conquer grief and pain, / we would be faithful to thy gospel glorious: / Thou art our Lord! Thou dost forever reign!